

山と博物館

第16巻 第4号 1971年4月25日

大町山岳博物館



大町での繁殖第1号(大助×あつ子)生後329日(4・23撮影)

カモシカの愛称募集

カモシカはかつて日本の動物園関係者から飼育の極めて困難な動物とみられた時代があり、昭和三十六年末には飼育中の個体は京都市動物園と大町山岳博物館に各一頭、計二頭のみという状況でした。しかし、現在では全国七カ所において合計四十頭のカモシカが飼われており、繁殖例も三十一例を数えるまでとなりました。しかも、飼育下生存年数五年を越えるものが十三頭もあり、カモシカの飼育技術はようやく確立された感があります。これら飼育中のカモシカは、それぞれ愛称がつけられ、親しまれてきました。特に飼育関係者にその名を知られてきたカモシカは、今も飼育最長記録を更新し続けている当館の「岳子」、繁殖第一号の三重県御座所日本カモシカセンターの「チコ」、第二号の神戸森林植物園の「初子」、人工ほ育成功第一号の当館の「大助」などでありま

す。昨年は大町山岳博物館でも、待望の飼育下での繁殖に成功することができました。

この当館では初めての出生カモシカと、昨年生後約三十日で保護され人工ほ育された二頭についてはいまだに愛称がありませんので、現在愛称を募集しております。

本紙愛読者の皆様におかれても左記によってご応募下さい。

記

一、名前をつけていただくカモシカ

A「大助」と「あつ子」との間に生れたオス。昭和四十五年六月二十九日生れ。

B長野県木曾郡南木曾町で保護されたオス。昭和四十五年六月二十四日保護当時推定生後三十日。

二、応募〆切 昭和四十六年五月三十一日

三、応募方法 ハガキにA:〇〇、B:〇〇と二

頭の名前を書いて、長野県大町市神楽町大町山岳博物館「カモシカ愛称募集係」宛お送り下さい。

四、賞 名前をつけていただいたカモシカの写真を添付したアルバムをそれぞれ五名の方に差し上げます。同名多数のときは抽選で決定いたします

カモシカ 二、食物

千葉 彬 司

最初のカモシカ餌づけ

昭和31年は例年になく雪が多かった。

ちよとどその日も朝から吹雪いていた。

安曇村稲核の郵便局長宅の生垣のツバキを

食べている動物が保護されたのは、その2月

2日の朝であった。

山岳博物館に連絡があり、雪深い道を大型

トラックで行ってみると、それはまきれもな

いかモシカの幼体であった。

生後約5カ月位と推定されたこのカモシカ

は村人達が見送る中を、ツバキの葉をお土産

にもらい、大町へとその日のうちに向った。

飼育舎はあらかじめ用意されていたので、

そこに移された。そして中に入れられたツバ



木の葉を食べる岳子

キの葉を無心に食べるこのカモシカの飼育が
その日から初まった。

今までカモシカを飼育した経験がないので

経験のある上野動物園に指導をあおいだ。飼

料、飼育についての注意などを聞いたが、幼

体の飼育の経験はないようであった。

お土産のツバキの葉は、そう何時までもあ

るものではない、まず一番最初はツバキの葉

を求めて花屋まわりをはじめた。生花用のツ

バキを買い占めるのである。

しかし、花屋といえども、エサにするほど

のツバキは毎日続かなかった。

雪の中から緑の葉をつけているマサキの枝

を与えてみた。食べるではないか。

さいわい館の庭には柵の代用にマサキが植

えてあった。

ツバキからマサキへと与えるエサは変

り、さらに、リンゴ、キャベツ、白菜、

サツマイモなどをマサキの葉に混ぜて与

えた。

「岳子」は与えられたものを良く食べた

リンゴなどの野菜、果実、根菜類の餌に

切り替わって間もなく、オカラ（豆腐の

しぼりかす）コヌカを一緒に与えた。

一週間としないうちに健康状態はあやし

くなり、獣医の手をわずらわせた。急性

胃腸カタルであった。

原因と思われるオカラ、コヌカが飼料

から除かれた。

最初に入った最初のカモシカの飼育は

毎日の糞の状態で館員は一喜一憂した。

マサキとて無尽蔵にあるわけではない。

館のものを食べつくしてしまうと、よそ

の生垣のものも事

情を話してもらい

うけてきたことも

ある。給餌の制限

あるいは屋外での

運動をさせ、何ん

とか現在まで健康

を維持してきた。

昭和37年、現在の

カモシカ放養園に

移されてからは、

十分に運動ができ

る広さと、木の葉

主体の飼料で、ま

ずまず健康状態は

良くなり、今は飼

育日数では日本記録を更新しつつける今日此

頃である。

現在飼育されているカモシカは7頭おり、

うち「岳子」を含め幼体あるいは人工ほ乳で

育成したものは5頭で、うち1頭は1仔の父

親となつてゐる。

人工ほ育されたものの記録は、「山と博」

第11巻12号や、毎年発行されている「カモシ

カ飼育年報」などに載せられているので今回

は省略した。

第一表 夏・冬の飼料表 1頭1日分

		(夏)		(冬)	
種	類	量(g)	種	類	量(g)
生葉(夏)及び乾葉類(冬)	アハダ		クワ	(乾葉)	60
	ウリカエデ		クズ	(乾葉)	50
	ヤマコナギ		コナラ	(乾葉)	100
	ガマズミ		青刈大豆	(乾葉)	80
	リョウブ		豆	がら	300
	ハシバミ				
	ハシバミ				
	ハシバミ				
	ハシバミ				
	ハシバミ				
	ハシバミ				
	約	2000			
	計	2000			590
野葉・根菜類	キャベツ	500	キャベツ		500
	ニンジン	300	リンゴ		300
	ニンジン	160	ニンジン		160
	サツマイモ	140	サツマイモ		140
	計	1100			1100
人工飼料	ベレット	200	ベレット		200
			ビートパルプ		200
	計	200			400
	合計	3300			2090

夏のエサ・冬のエサ

カモシカを飼育しはじめた当初は、毎日か

試行錯誤であり、何回となく飼料テストをし

健康によくならないものは除外しつつ、飼料表を

つくり、近年ようやくほぼ安定した健康状態

が維持できると考えられる飼料を与えること

ができるようになった。

健康状態の維持は飼料ばかりでなく、約八

〇〇㎡の放養園で充分運動することができ

ことも大きな要因のひとつである。

一年の飼料表は二つある。生の木の葉を中

心に与える夏のものと、乾燥した葉を与える

冬のものとする。

だから夏のエサといっても、生葉の手に入

る5月中旬から10月中旬までのことであり、
放養園の近くで手に入るコナラの葉を主体に
サクラ、クリ、カエデ等で、一例として一九
六八年の夏には12種類の木の葉を与えている
与えるのは午前と午後の二回であり、もつと
もこの12種類を1回の給餌に与えるわけでは
なく、6月頃には比較的少量に手に入った種
類が9月には入手困難な場合、他の種類に変
えているので、約5カ月間与えた種類の合計
が12種類というわけで、平均は4〜5種類で
ある。

これらの種類の木の葉は、比較的少量に手
に入り易いものを嗜好テストして選定したも
のである。

海川(山博学芸員)の嗜好テストでは、脂
肪や蛋白質の多いもの、糖分の多い甘味のあ
るもの、盛夏には含湿度の高いもの、常時適
度な繊維質のあるものが嗜好度が高いようだ
である。

与えられる木の葉は、枝ごと束にして与え
それ以外の野菜、ベレットは給餌箱で与えら
れている。

冬の場合は常緑のものが手に入らないので
夏の間には収集したコナラを中心にクズ、クワ
青刈大豆を与えている。

第二表

胃の内容物の植物(6頭分)

食べていた部分	種	類
葉	マツラマラ	属ゲジガサツ
	グマシルバ	イギウスモ
枝と葉	ブコガグリ	キョクイソ
	ノメシマト	シウバママ
ツボミと枝	シヒシヤサ	ニシオコクヤ
	アコクミ	ヤマホツツ
花と茎	ミヤマ	マダツ
	ヒメヤ	シマザ
葉と葉柄	ヤママ	ラマツ
	ミヤマ	オオカ
小枝	オオカ	メロモ
	オオカ	メロモ
芽	オオカ	メロモ
花と葉	シウ	ジョウ

これは夏の間に枝から葉だけでもぎ取ったものを火力乾燥機にかけ、乾燥し麻袋につめて貯蔵するわけで、生の木の葉の手に入らない約7カ月間は、この冬用飼料に頼ることになる。

乾燥葉を使用しはじめの頃は、カキの葉、オーチャードグラスも用いたが、カキの葉は多量に入手することが困難になり、またオーチャードグラスは多量に手に入るものの、他の葉に比べ嗜好度が落ちるので中止してしまつた。

乾燥葉の他にはビートバルブ、大豆がらを湯でもどして与えている。はじめはアズキがらも使用したが次第に手に入り難くなり、大豆がらを多量に使用したのも今年がはじめてである。与えた結果はビートバルブよりは嗜好度が高いようである。

夏と冬の飼料表は第一表のようである。この冬用乾燥葉はカモシカの健康状態にはすこぶる良好のようであるが、この2-3年問題がでてきている。まず原料の入手が次第に難かしくなつてあること、飼育頭数が増加するにつれ、収集する量も多くなるわけであり、それと同時に火力乾燥機の乾燥、サイロを使用中ではとの案もあつたが、以前に実験済みで、サイロのものは全然食べよ

うとしないし、乾燥が不良で目にみえない程度のカビがついたものもカモシカは食べようとしてない。近い将来、乾燥葉については他の飼料を開発して改めなければならぬ段階にきている。

野外での食物

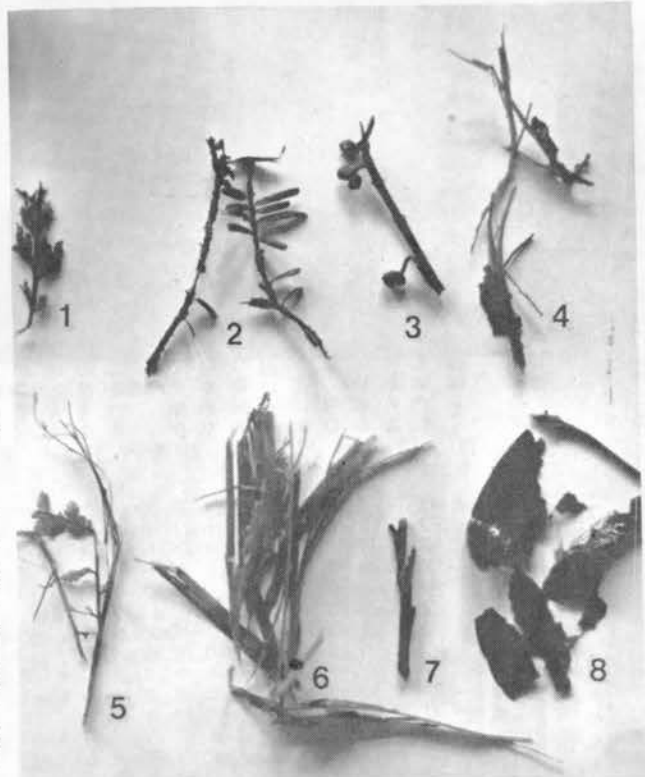
一頭が7カ月間に食べる量は、コナラ約21kg、青刈大豆約17kg、クワ約13kg、クス約11kg、合計62kg、乾燥したコナラの葉1枚は約02gであるから、収集する葉の量、労力は想像いただけると思う。

食べている部分の一番多いのは葉の部分で次いで枝と葉、ツボミと枝、などで、枝は先の方から10-15cm位の所を食べているようである。

獅師のいうガンベとササは6頭のうち1頭から多量に発見されただけであるところからそれぞれ植生の違う地域では、その地域の植生の中の嗜好度の高いものを食べているようである。6頭が食べていた植物は20種類を数えた。(第2表)

獅師の話によるとガンベ(オオカメノキ)ササ(チシマザサと思われる)を多く食べるという。

北アルプス山麓で4月から7月までの間に雪崩などで死亡したカモシカの胃の内容物を調べてみた。



北アルプス山麓のカモシカの胃内容物(大和田川) 千葉原因
 ①シノブカグマ ⑤ヤマソテツ
 ②コメツガ ⑥シウジョウスゲ
 ③マンサク ⑦オオバクロモジ
 ④ナライシダ ⑧マンサク

また菅野新一氏によると宮城県蔵王山では冬はヒノキの葉、ブナ、クリ、ナラ、イタヤ、ヤマツツジ、(アオカ)、(サルナメシ)、「(内は地方名)」の枝皮をかじるといわれ、春にはアオタモ、タラの葉を食べるそうである。

三重県の鈴鹿山脈のものは、アスナロ、スギなどの針葉樹が最も多く採食されており、他にイヌツゲ、ミヤマシキミの実を食べている(岡田弥一郎、角田保氏)

栃木県の奥日光で4月発見された死体の胃の内容物を御厨正治、小原巖氏が調べたところ、一番多く食べられていたものはナナカマド、チシマザサであり、次にオオカメノキ、ハリガネキノリ、ホネキノリ、少ないものはカエデ属、ヒロハツリバナ、コメツガ、ウスバシハイタケであった。

やはり石川県の白山のカモシカ2頭分の死体の胃の内容物を里見信生氏が調べたところ、一番多いのはミヤマカワラハンノキ、次いで

ミズナラ、ケキブシ、マルバマンサク、ヒメモチ、マルバアオダモ、オオバクロモジの順でコメツガ、スギ、チシマザサは全体量の1%未満である。

これらを見てくるとカモシカの食性に意外と共通種が少ないことに気がつく。胃の内容物を調査した季節的違いもあるであろうし各地の植生の違いもあるであろうが、食性の巾というものが割合と広いものであるということがわかる。

また地域によつては針葉樹のスギが多食されているのに、スギがありながらそれが食べられていないのは、それ以上に嗜好度の高い植物が容易に得られるからであろう。

生後70日までの幼体で海川が実験したところ64種類もの植物を食べている。嗜好度の差こそあれ、この食性の巾の広さが、将来カモシカを保護していく上で、キーポイントになるのではないかと考える。

(山岳博物館学芸員)

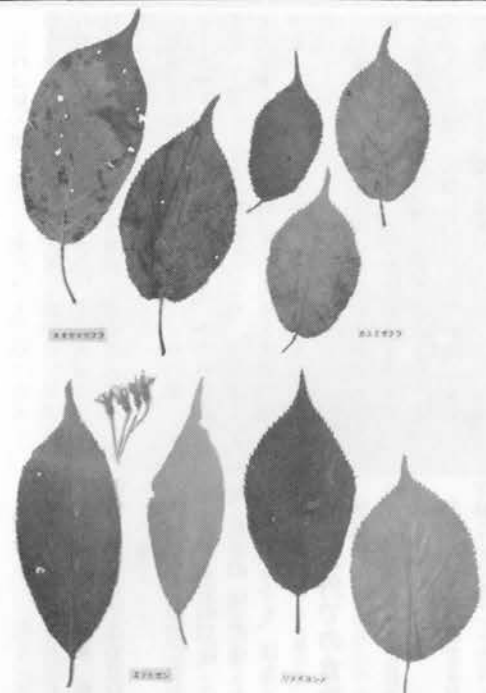
後立山山麓のサクラ

高橋秀男

この地域のサクラについては白馬、後立山連峰と東方山麓のフロラ(神奈川県立博物館研究報告第一巻第四号 一九六九)をまとめるとき、その中で野生している種類のリストをあげ、採集した主な産地を記しておいた。ここでは(野生種に一部栽培品を含め)簡単に解説をすることにしたい。

サクラは花、果実、花序、葉などに現われる形質によって分類されるため、標本は花の時期と葉及び果実の時期の二回にわたって採集するとともに、その木の性状、生育環境などもメモしておかねばならない。ガクの形態花梗の長短、花序の形式、葉身の形とそれらの毛の有無に変異が多く、したがって沢山の木から各部分の標本をつくるのが正しい同定をする上に大切なことである。

サクラは厳密にいえば、個体の一つ一つがみなそれぞれ異なった性質をもっている位であるが、その量には変化があり、稀に殆んど無毛品もある。しかし類似のヤマザクラは分布域を異にしており、ヤマザクラでは葉縁の鋸歯が細齒となり、成葉の裏面が白色となる点で識別できる。



オナヤマザクラ、エゾヤマザクラ、葉は一般に楕円形細かい鋸歯があるがカスミザクラの

あり、また雑種ができ易く分類の難しいグループとなっている。かつて信濃の天然記念物を調査された小泉秀雄氏は青木湖畔で沢山の新品種を発表しているが、これなど今はみなオヤマザクラと同一物にされている。私たちが普通にサクラと呼んでいるものはサクラ垂属とウワミスザクラ垂属に二大別できるが、花が大きく美しく観賞用となるサクラは前垂属であろう。

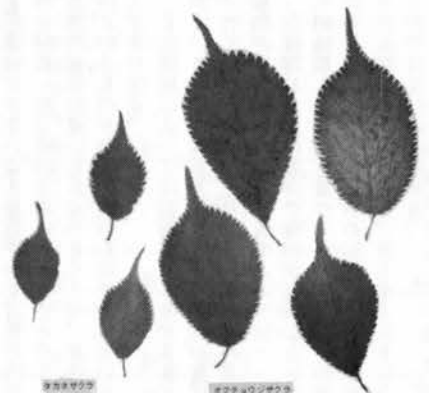
カスミザクラ、ケヤマザクラと同一種であるともいう。葉の質は薄く、一般に倒卵形で鋸歯は短い芒に終わる。葉柄には開出毛があり、密腺は葉柄の上部につく。花序は散房状、開花は葉と同時性で、全体赤味を帯び、花期はソメイヨシノより遅れる。安曇地方の山野を代表する野生サクラであり、プナ帯に生えときに人家付近に栽植される。一般に葉柄、花梗、花軸に開出毛があるが、その量には変化があり、稀に殆んど無毛品もある。しかし類似のヤマザクラは分布域を異にしており、ヤマザクラでは葉縁の鋸歯が細齒となり、成葉の裏面が白色となる点で識別できる。

ように先端は芒状とならない。葉の質は厚く下面は多少粉白色となる。花序は散花、花はカスミザクラより大きく若葉とともに淡紅色をなし見事である。葉の下面、葉柄、花柄は無毛であるが、毛のある形も母種に混生し、これをケエゾヤマザクラと呼んでいる。カスミザクラよりやや寒地を好み、シラビン帯下部に達し、量は少ない。

タカネザクラ、ミネザクラ、葉は倒卵状楕円形又は倒卵形で先端は尾状に鋭く尖り、葉縁には著しく欠刻状の重鋸歯がある。密腺は葉柄の上部につく。花序は散房又は稀に短い総梗がある。シラビン帯からハイマツ帯の低木林にやや普通に生え、初夏の頃でも雪渓、ぎわに花をみることがができる。葉柄や花梗、ときにごく筒に開出性の毛をもつ形がありこれをチシマザクラと呼び、上高地、尾瀬などから北方に知られるが、後立山でも杉本順一氏が長野県植物総目録に五竜岳周辺の牛首を産地としてあげ、筆者も白馬岳で葉柄に毛の疎生するものをみた。毛の程度は変異が多く、チシマザクラを本種の品種程度の分化と考える説もあり、いずれにしても後立山のタカネザクラとチシマザクラについてはのこされた課題であろう。

オクチヨウジザクラ、葉は倒卵形で先端が尾状に長く尖り、縁は欠刻状の重鋸歯がありタカネザクラに似ているが、それより鋸歯の先は円味を帯びる。密腺は葉身の基部につき葉の両面、葉柄、花梗、ガク筒に毛が密にあり。ガク筒は長い筒状で下部が少しふくらむ山麓のプナ帯に散発的に生えや普通であるエドヒガン、花は葉前性でソメイヨシノより早く、山麓で最初に春を告げるサクラである。ガクは壺状の鐘形でガク筒の下部はふくらむ。

密腺は葉身の基部につく。各地に栽植品が多く、人家付近や社寺林に見られ、自生品は少ないと思う。ソメイヨシノ、オオシマザクラとエドヒガンの雑種F1で明治の初めに東京の染井にある。



る植木屋によって広められたという。密腺は葉柄の基部につき、花は葉に先だつて開く。この種は生長も早く花は大きく美しいので路傍、提防、公園、学校、庭園などに栽植されているが、公害に弱く、またテングス病にもかかり易いため、最近では衰退している。植樹に力を入れるとともに、もう少し保護、管理にも気を配りたいものである。

ミヤマザクラ、葉は欠刻状の重鋸歯があり両面有毛で、密腺は葉身の基部につき、その形は平たく、花梗や葉柄には伏毛がある。花は小さく、花弁の先は凹まず、総状花序となり花梗の基部に大きく目立つ葉状の小ぼうが特徴となる。花は白色で葉と同時性であるが花序にかかれて目立たない。プナ帯からシラビン帯下部の溪畔に散発的に生え、あまり見る機会に恵まれない。このほかウワミスザクラ垂属にイヌザクラウワミスザクラ、シウリザクラが分布している。(神奈川県立博物館)

山と博物館 第16巻第4号
一九七一年四月二十五日発行
発行所 長野県大町市TEL.026-221-1111
印刷所 大町市下仲町 印刷部
定価 年額 三〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号(長野二二)二九三